

KITA

Kitakyushu
International
Techno-cooperative
Association

KITA ニュース

第21号

2004
October
No.21

随想

What's New

ニュース&レポート

わが社の研修協力記

講師の研修への熱意

KITA研修コースの紹介

KITAの国際親善交流

トピックス



KITA主催親善バスハイク(平成16年7月31日)

随 ZUISO 想 •ずいそう•



(財)北九州国際技術協力協会
理事 研修部長
松本 健三

■ よろよい明日を、世界の人々と

コースリーダーを拝命してから7年余りが経過しましたが、この間にJICAの国内研修業務も時代の動きを反映して、さまざまな変化を見せています。

そのひとつは移転対象技術の変化です。地球の自然浄化能力を大きく越えた経済活動の発展は、地球温暖化や大気汚染、廃棄物処理など世界的な環境問題としてクローズアップされ、本来の自然環境の保全と持続可能な発展を両立させる社会の構築が求められています。

この動きを受けて、受託している研修コースも、早くから開講している環境汚染対策技術に加え、環境保全型生産技術(クリーナープロダクション技術)に関連するコースも多数開講するようになってきました。この技術は生産性の向上と環境負荷の減少を両立させるすぐれた産業環境管理技術であり、JICAが集団研修コースに求める概念のひとつである『地球規模的な課題に対応すること』にジャストミートするものだと思います。

現在、途上国においても、クリーナープロダクションナショナルセンターを創設している国もあり、各国からの協力要請も増加しており、積極的に対応している状況です。

次に、研修の成果にたいする査定が大きく取上げられ、カリキュラムが途上国のニーズに十分対応している内容が、人材育成や技術移転が効率よく行われ、効果を挙げているのかという観点から、各研修コースの評価がより定量的に実施されるようになりました。

具体的には成果の評価方法に目標による管理制度が導入されたことです。コースリーダーは4～5項目の研修到

達目標を事前に研修員に知らせてゴールを示し、講師の皆様方のご協力も得て、意欲的に勉強する環境を整備しながら研修を進め、研修終了後、個人別に目標到達度を出来る限り客観的に採点することにより、研修員ならびに研修コースの出来栄を報告するシステムで、絶えざる研鑽を求められています。

このようにして5年を1サイクルとする研修が終了しますと、過去の成果を評価して次の5年間、新規コースとして開講することの可否が審議されることになります。

更に、このような国内研修の評価と平行して、研修員が自己の課題解決に取り組んだ成果であるアクションプランの実践状況に関する情報が入手出来れば、技術移転の正しい評価が下せますので、よろよい研修のために、それが可能な体制作りもJICAに協力して心掛けたいと思っています。

以上述べましたように、様々な改善が進んでいますが、将来に目を転じますと、今世紀半ばにも100億人に達する世界の人々が、精神的にも物質的にも恵まれ、自然と調和しながら人間中心の生活を営む世界を作り出すためには、科学技術の更なる発展が必要であり、技術者の負っている責任は今後益々重大になってくるものと思われます。技術における未来予測やコストと安全性のような、相反する価値を同時に両立させることは技術者にしか出来ません。

科学技術の成果を人間、社会、自然に及ぼす影響を考えながら行使できる、倫理感のある技術者の育成を行うことも大切であり、研修業務に携わる皆様方のご配慮を何卒宜しくお願いいたします。

「西日本プラントエンジニアリングシンポジウム2004」開催

当協会では経済産業省並びに北九州市のご支援を得て、「西日本プラントエンジニアリングシンポジウム2004」を本年10月5日から7日までの3日間、北九州市小倉北区で開催いたします。本シンポジウムは、地場企業の発展に寄与することを目的に、1992（平成4）年に第1回が開催されて以来隔年毎に実施され、本年は第7回を迎えることとなりました。

今回は、北九州の立地条件を生かした海外マーケットへの事業拡大にあたっての諸問題と進出事例の紹介、並びに近隣諸国の企業に対抗するための高付加価値化をはじめとする企業体質強化の方策と事例を紹介することによって、地場中堅企業の新規事業進出並びに競争力強化に資するとともに、これに必要な人材育成、活力の増進に対する支援を目的として開催いたします。企業並びに各種団体・研究機関の管理者、技術者、研究者をはじめ、関係の方々のご参加を期待しております。

期 間：2004年10月5日（火）、6日（水）、7日（木）
3日間

主 催：（財）北九州国際技術協力協会（KITA）

共 催：北九州市

場 所：北九州国際会議場 2F「国際会議室」
（北九州市小倉北区浅野3-9-30
Tel.093-541-5931）

実施内容

（1）.企業体質強化と産学連携に関するシンポジウム （10月5日）10:00～17:00

.特別講演「元気を出せ中小企業 - 技術でも、
流通でも中国に負けない経営」

（政策研究大学院大学 教授 橋本 久義氏）

.基調講演「21世紀型中小企業の経営戦略」

（萩国際大学 国際情報学部

特任教授 皆川 重男氏）

.講演（事例発表1）「ポンプのエネルギー診
断と効率改良技術」

（ニッセツ大阪エンジニアリング㈱

部長 国末 義英氏）

（コロコートジャパン㈱

代表取締役社長 田中 覚氏）

.講演（事例発表2）「ASPの活用による設備管理」

（三菱化学エンジニアリング㈱ 九州支社

設備管理センター長 中村 武久氏）

（同 社 設備管理センター

グループマネジャー 中石 英俊氏）

.パネルディスカッション

「企業における技術者教育と大学への期待」

（2）.地場企業の海外事業進出に関するシンポジウム

（10月6日）10:00～17:00

.特別講演「九州企業とアジアビジネス」

（福岡大学 商学部 教授 居城 克治氏）

.基調講演「九州企業の海外進出の現状」

（（財）九州経済調査協会

調査研究部長 高木 直人氏）

.講演（事例発表1）「㈱三井ハイテックの海
外展開について」

（㈱三井ハイテック 常務執行役員

技術開発本部長 三井 康誠氏）

.講演（事例発表2）「TOTOの中国における
マーケティング展開について」

（東陶機器㈱ 国際営業本部長 木下 学氏）

.パネルディスカッション

「海外事業進出にあたっての諸問題」

（3）.シンポジウム関連企業見学

（10月7日）9:00～17:00

.見学先 AM:北九州エコタウン

（廃木材廃プラスチック処理工場）

響灘地区風力発電施設

PM:北九州学術研究都市産学連携施設

㈱三井ハイテック金型事業所

.人 数 45名（貸切バス1台）

事 務 局：（財）北九州国際技術協力協会

〒805-0062 北九州市八幡東区平野1-1-1

Tel.093-662-7174

Fax.093-662-7177

e-mail:info@kita.or.jp

最近3カ月間(平成16年7～9月)にKITAで研修修了した6コース48名

(平成16年10月)

	コース名	受託先機関等	KITAコースリーダー (サブコースリーダー)	KITA研修期間 (月/日)	研修人数
クリーナー プロダクション	鋼材加工の品質管理	JICA	木下 健太郎 (三浦 正 克)	6/7～9/30	8
	クリーナープロダクションのためのプラントメンテナンス技術	JICA	劔 持 武 泰	5/17～9/24	7
	プラント用必須予備品の改善と製作	JICA	横 山 清 (寺 井 健 治)	5/10～9/17	7
	持続可能な産業開発トップ マネージメントセミナー	JICA	三 木 義 男	8/16～9/16	10
環境管理	産 業 環 境 対 策	JICA	川 崎 淳 司	5/24～8/19	6
	フィリピン・都市及び産業 における環境管理 環境 対処能力向上	JICA	南 久 雄	6/7～8/4	10

計48名



JICAコース「鋼材加工の品質管理」



JICAコース「クリーナープロダクションのためのプラントメンテナンス技術」



JICAコース「プラント用必須予備品の改善と製作」



JICAコース「フィリピン・都市及び産業における環境管理 環境処理能力向上」

平成16年度韓国中小企業技術者専門研修オリエンテーション

8月31日から10月22日までの55日間、北九州プリンスホテルで韓国中小企業技術者に対する11回目の受入研修が下記4コースで開講しています。

(1)「金属加工技術の品質保証」、(2)「高付加価値生産性向上技術」、(3)「中小企業管理者のための生産性向上」、(4)「設備診断技術と改善方案」

研修をより効率的に行うために、標記打合せを8月4日午後、ソウル近郊の韓国中小企業振興公団付属研修院で行いました。研修の重点目標、研修中の留意事項、研修設備内容等の共通項目説明の後、コース別に分かれてコースリーダーから以下の内容につき説明と質疑応答を実施しました。自己紹介 研修の狙いと教科内容 各研修生の業務内容と業務上の問題点の把握。

打合せの結果、日本語能力が問題点と考えられます。研修使用言語である日本語の障害克服のため、5週間の研修院での泊り込み研修が実施されており、今年は研修生の能力に応じて3段階に分けて(去年は2段階)行われました。しかしながら、平均的なレベルは例年より低く、研修期間が今年の60日から55日に短縮されたこともあり、一段の工夫が必要と考えられます。

韓国研修院では設備増強工事が計画され、中小企業の中国進出にも関連して中国からの受入研修を計画す

るなど強化を図っているようです。

尚、当日午前には公団並びに本研修実施機関である両国の産業技術協力財団と予算削減の動きの中で、本研修事業の今後について討議しました。この研修の継続可否は、国の方針に係わることでありますが、出席者の中では、中小企業の体質改善には、人材育成事業がこれまでのKITAでの研修実績を踏まえて最適であることを確認いたしました。

(技術協力部 吉永博一記)



韓国中小企業技術者専門研修開講後のレセプション
(平成16年8月31日)

インドネシア(スラバヤ市)CITY EXPOで
環境協力事業をアピール

スラバヤ市CITY EXPOの北九州市・KITAの合同のブースにて

7月31日から9日間にわたり、インドネシアのスラバヤ市でCITY EXPO2004が開催されました。開会式には大統領も出席。約150の都市・大学・団体が参加

する大規模な博覧会となりました。その中で、スラバヤ市から要請を受けたKITAが唯一海外から参加しました。展示は北九州市とKITAが合同で行い、KITAとして、1.KITAの活動概要 2.スラバヤ市における本年度のゴミの分別収集及び堆肥化のプロジェクト 3.スマラン市における01~03年度水質浄化プロジェクト について紹介しました。会場には連日大勢の方々が訪れ、インドネシアの多くの都市から支援要請が相次ぎ、その模様は日本語の「じゃかるた新聞」トップ記事にも紹介されました。また、合間をぬって日本文化を紹介するなど、多くの方々と触れ合う貴重な経験もすることができました。

EXPOを通じ、我々の活動が、より多くのインドネシア各都市の方々に知られることとなり、今後も我々の技術を活かし、インドネシア全域に渡り、それぞれの都市に合った活動をしていきたいと考えています。

(KITA環境協力センター 柴 郁代記)

中国・大連市「2004年中国国際環境保護博覧会」に出展

KITA環境協力センターでは、9月2日(木)～9月4日(土)にかけて開催された「2004年中国国際環境保護博覧会」に出展し、KITA及び北九州市による環境ビジネス推進のPRを行ないました。20000㎡の会場には、中国・日本・韓国・カナダ・ドイツ・フランスなどから270社・団体が出展し、3日間の来場者数は3万人を越える盛況となりました。

その中でKITAのブースでは、公害克服の歴史やKITAの事業、大連市との環境国際協力などをパネルやビデオで紹介し、多くの来場者から「リサイクル技術を持つ企業を紹介してほしい」「KITAの研修事業について詳しく聞きたい」といった質問が寄せられ、高い関心を集めました。

さらに最終日となった9月4日の閉会式では、「優秀組織賞」受賞の5社・団体が発表され、我々のブースは北九州市・KITA・企業連合として同賞を受賞することができました。今回の出展では、KITA及び北

九州市の知名度をさらに高めることができ、今年10月28日(木)に開催される「アジアエコビジネス商談会」に向けた絶好のPRの機会となりました。

(KITA環境協力センター 川寄孝之記)



KITA出展ブース(平成16年9月)

フィリピン・クリーナープロダクション(CP)導入協力



フィリピンでのCPセミナー(平成16年9月6日)

フィリピン・セブ地区の家具工業に対するCP導入協力のため、同地へ出張しました。今回のCPセミナーはフィリピン開発銀行(DBP)、環境資源省(DNER)およびセブ家具工業組合(CFIF)の主催で、セブ市のホテルで開催されました。セミナーの概要は下記のとおりです。講演の他、ケースワークも実施されました。

ケースワークでは出席者が4班に別かれ、コーディネータが想定した家具工場にCPを導入した場合、どのようなシナリオになるか2日間討議を行い、その成果発表

会がありました。最終的には出席者が所属する会社にCPを適応した際のアクションプラン作りを行いましたので、CPが実際に導入されることが期待されます。

このように、出席者全員まじめに取り組み、充実したセミナーでした。このセミナーでCPへの理解が得られたと考えます。

セミナー名称:セブ地域家具工業会に対するCPセミナー

開催日:2004年9月6日～9月8日

出席者数:約40名

KITAからは藤田、藤本が出席し、CPに関する講演を次のテーマで行いました。

藤田... CP実施時の評価法:5S運動と品質評価
会社におけるCPの展開法と評価法

藤本... CPの世界的流れ
CPの実施可能性分析

KITAの他、上記フィリピンDBP、DNER、CFIF幹部の講演もあり、環境関係の法律及び融資に関する説明等もありましたので、出席者は事業改善に関する全般的知識を習得できました。

セブ地区の家具工業がCPを実行し、収益向上、公害防止を行い、競争力が強化できるよう今後もKITAが協力できればと思います。

(技術協力部 藤本研一記)

第11回九州・韓国経済交流会議に出席

第11回九州・韓国経済交流会議が7月15日に熊本で開催され、KITAからも参加しました。九州側からは、松井九州経済産業局長を代表に7県、2政令市、経済団体等から45名が参加し、韓国側からは、李産業資源部国際協力投資局長を代表に政府、地方自治体、経済団体等から33名が参加しました。

42事業が提案され協議の結果、合意を得た39事業を双方の協力事業として5テーマ20項目に取りまとめました。この中でKITAが実施している「中小企業技術者研修事業」については、円滑に行われていることを評価し、この事業の実施のため双方は引き続き協力することとしました。その他の主な協議結果として、九州側で実施する「対韓国VISIT九州キャンペーン」「FTA締結後を睨んだ更なる連携の強化の可能性を探る調査研究事業」等に対し、韓国側は可能な限り協力することとしました。「各種交流ミッションの派遣・受入れ」「フェア、投資環境説明会開催」「自治体間交流事業」等の実施についても、双方は協力し支援することとしました。

同会議の併催事業として「第4回九州・韓国民間ラ

ウンドテーブル」が7月14日に開催されました。本ラウンドテーブルは、九州・韓国経済交流会議に参加する民間企業と実務者による自由な意見交換の場として設けられ、民間独自の交流を深めることを目的としています。九州側より「観光交流」、韓国側より「産業ビジネス交流」について課題が提起され自由な意見交換を行いました。併せて「日韓FTA締結に向けた取組み」についても状況報告がなされました。

(技術協力部 木下健太郎記)



若者よ 北九州から世界を見てみよう!



福岡県立東筑高校で新入生に講演するKITA江藤課長

5月21日、KITA事務局は東筑高校からの依頼で「この地球で共に生きよう 地球規模の愛」と題して新一年生の生徒さんにお話ししました。

新教育課程により東筑高校では「社会情勢を知る」というテーマで生徒の人間としての在り方や生き方、又、生徒の進路について考察させる学習活動を行っております。当日は医療・国際協力・環境問題・技術開

発等の6セクションに分かれてそれぞれのテーマごとに講師が招聘されました。約350名のピカピカの高校一年生の皆さんは希望に副った講演教室が選べ、「国際協力」に関心があった生徒さんは70数名でした。多分「南北問題」なんてまだ知らないだろうと質問したところ、「先進国と開発途上国の経済格差です」とのりっぱな答えに講師は驚嘆し、すぐに二の句が継げなかったのは想像にかたくないところです。

後日、生徒の皆さんからの感想を送ってこられましたので一文ご紹介します。「この講演を聴いて僕は世界の身近さを感じた。KITAの活動で世界各国の人達がこの北九州を訪れていることや日本が行っている様々な国際協力も知った。僕たちひとりひとりの活動でもちゃんと世界に協力することができるなんて聞いて、自分も世界に貢献したいと思った。」

又、8月25日には小倉高校の生徒さん7名がKITAを訪問されましたが、昨年から引き続いて今年もKITAの環境保全技術協力について関心があり、熱心に対応者の話に耳を傾ける様子に心打たれました。

(事務局 江藤郁子記)

新日鐵化学(株)九州製造所

- 化学工場のメンテナンス実態研修 -

北九州市戸畑区大字中原先の浜46 - 80

装置産業の設備管理の具体的事例を帰国後活かしてほしい



前列左から設備管理センター長 山崎晋吾氏、マネジャー 田中勝実氏、
後列左からトライボセンター専門部員 野村雅樹氏、管理センター 姫野仁見氏

KITA 研修開始当初から関わり、20年余りが経ちましたが、近年研修員のレベルが高くなってきたと実感しています。研修姿勢も意欲的な方が多く講義に興味を示し、熱心にメモを取り、質問も多く、研修もやり易くなってきましたしやり甲斐を感じます。

特に現実的なコスト改善事例やトラブル事例には興味

を示し、よく質問もできます。

又、弊社独自の設備管理手法のひとつである通称「保全マップ」の説明にも関心を示し、敏感に反応してきます。

機械の振動解析の実例やトラブル事例の話にも質問が多くなってきましたし、実務上の安全対策や防災関係の説明にも興味を示します。

潤滑油の分析実習は、研修員には珍しく初めての経験のようで、人体の異常を見つける血液検査と同じようなものとの説明に納得し、熱心な反応が見られます。こういう場合はこちらも説明も乗ってきますし楽しくなります。

日本で学んだこれら多くの事例が帰国後いつの日か役立つことを期待しつつ、日本がかの地に進出するときに助け合えることが出来ればと願ってまいります。

近年の環境変化、技術革新のスピードに対して、研修資料のアップデート化には少し気になっていることもあり、当社での研修カリキュラム全般の見直しも考えているところです。

望むならば、この研修内容がどこまで理解されたのか分りにくい悩みはいつもありますし、研修員の帰国後の活躍を聞かせてもらえると今後の参考にもなります。

わが社の研修協力記

株長府製作所

- エアコン製造現場の詳細見学 -

下関市長府扇町2 - 1

物づくりの根幹を見て聞いて帰国後のヒントにしてほしい

7年前から研修を受け入れています。研修員は熱心で態度も良く、エアコンの製造ラインのロボットなど設備が動いているものに興味を示します。帰国後の参考にとの思いからでしょうか、生産性向上に関して鋭い質問をする人もいます。質問がよく出るように、こちらから指名して質問してもらおう工夫もしています。

研修員のレベルの総合的な印象としては、受入れ当初は10点満点で平均9点、直近では6点くらいの人もいましたが、今は平均8点でしょうか。唯、一生懸命何かを吸収しようとする態度は、全員に感じられ好感が持てます。わかりやすいように製造ラインの直ぐ近くまで接近して、細かいところも見せながら生産上の技術的ポイントを説明することにしています。エアコン製品の最終検査を全自動でやっているところは、特に熱心に見学しているようです。プレス加工、ロー付作業、組立作業等、研修員の興味はつきない様子です。

エアコンの5割近くは輸出していますので、当社の

ブランドも覚えておいてもらいたいものです。

物づくりの根幹は、設備の大小や新しさ古さの差はあっても、故障させない工夫や改善の実施とあらゆるムダを排除することと、人造りにあり、どこの企業でも共通です。研修員が帰国後直ぐには役立たなくても、いつの日か研修を思い出して職場の問題解決のヒントになればと期待して説明しています。

ロボットによる自動化を計っていますが、費用対効果でコストメリットがあるから実施しているのであって、メリットのないところは自動化していません。この両方の説明を理解してくれる研修員は優秀で、教える側としてもその反応はうれしいものです。



左から製造一課課長 令旨辰彦氏、製造二課主査 國本里博氏

18年間KITA「設備診断技術コース」講師を担当して

日本診断工学研究所
代表研究者 豊田 利夫

18年前の新日鉄勤務時代から「設備診断技術」コースの講師を務めています。

1. 海外集団研修「設備診断コース」設立のいきさつ
コース設立(1984年)に際し、小職が八幡製鉄所設備部設備技術試験室長時代に、元上司のKITA副理事長清水泰氏から、「君のやっている設備診断技術で海外研修コースを作る。内容は任せるからコースを企画してくれないか」と頼まれたのがきっかけです。

自分が社内で本務としている研修コースが出来るのは大変有難く、「判りました!」と快諾し、当時開発したばかりの最新鋭技術を取り入れたカリキュラムや教材を準備しました。

2. 講師として心掛けたこと

会社で本務としている「設備診断技術」に関するコースですから、常に愛着を持って講義に取り組みました。

KITA研修は、JICA研修事業の一環で、「税金で海外研修員を教育している」のですから、コースの最終目標は、「日本にきてよかった。日本が好きだ」という親日派を作ることだというのが講師を務める小職のフィロソフィでした。

そのため、コースリーダー時代は会社勤務で多忙でしたが研修旅行には必ず同行し、寝食を共にしながら相互理解を深めるよう努めたつもりです。

また講義にあたっては、下手な英語で(通訳さんには困ったときは助けてもらいますが)直接話しかけることに心がけました。

3. お礼とご恩返し

18年間にわたるこのコースのコースリーダーと講師を通じて、優秀な海外若手エンジニアと毎年楽しい充実したひと時を持つことができ、果報者だと思います。多くの方のご指導のお蔭と心からお礼申し上げます。とともに今後は幾許かのご恩返しをしたいと思っています。



講義中の筆者(前列右側)

講師の研修への熱意



講師雑感

KITA 講師 瀧 良男

KITA 研修員への講義「溶接工学とその応用」をお引受けして早くも10数年が経過しました。この間十分な効果もわからないままトライアルエラーの繰り返しばかりで、反省の多い毎日です。

一方、帰国後の研修員が、この講義の内容を活用して成果を得たとの連絡を受け、教育指導の重要さとその喜びを感じることも再三ありました。

現在受持ちの講義は次の3コースです。

1. プラント用必須予備品の改善と製作
2. 鋼材加工の品質管理
3. クリーナープロダクションのためのプラントメンテナンス技術

これら3コースはそれぞれ性格が異なるため、その内容は多少変化させておりますが、共通する目標と具体的内容は次のとおりです。

(1) 発展途上国でもあり、使用する工業設備・技術レベル等は、当然日本の現状と異なるので、この点を考慮して指導する。

(2) テキストのみでは理解しにくいような事例は、「小型サンプル」や「溶接テストピース」などを教材として使用する。また溶接アーク現象等の動的変化はVTRを使用する。このように教科内容を時間的に変化させて、とかく単調となり易い講義にアクセントをつけるよう努力する。

(3) 自分自身が長年にわたって体験した貴重な成功例も失敗例も研修員にとっては貴重な資料です。失敗を克服した解決法を理論的・技術的に説明する。この解決法が帰国後活用されることを願っています。

以上、今までの講義と内容を反省し、今後の改善に役立てたいと思っております。

各位のご批判、ご指導により更なる成果向上に繋がれば幸いです。



講義中の筆者(前列中央)

K I T A 研修コースの紹介

(目的とねらい)



JICAコース『クリーナープロダクションのための工業設備のリノベーション』

コースリーダー 安藤 雅夫

このコースは1990年にスタートし、今年で15回目を迎えますが昨年までに27カ国から116人の研修員が参加しました。

クリーナープロダクション(環境保全型生産技術)は、1989年に「UNEP」によって提唱されたもので、その基本は工業製品の製造の過程で、使用する材料やエネルギーの消費を最小にして、環境破壊物質の排出を減らし、同時に企業の利益を増大しようというものです。

本コースでは、化学、石油精製、鉄鋼、食品、窯業等のプロセス工業においてプラントの運転、設備設計、保全を担当する技術者を対象として、クリーナープロダクションの先進国である日本の優れた技術や知識、経験を学習し、発展途上国のプロセス工業の近代化と環境保全に貢献することを目的としております。

本コースでは先ず日本におけるクリーナープロダクシ

ョンの発展の歴史とTPM、5S、改善活動の実施例を学習し、環境問題、省エネルギー、QC、VE等の取り進め方を講義と演習および実施している企業の見学によって習得します。

次に設備のリノベーション(改造計画)を実施できる能力を養成するために、圧縮機、ブロー、ポンプ、熱交換器、分離機、電動機等の最適仕様の選択法を学習し、また使用する材料の選択と腐食対策も学びます。更に自動化に必要なプロセス制御、シーケンス制御についても演習によって習得します。

また設備の運転効率を上げるための最新の保安全管理技術についても学習し、設備診断法、非破壊検査法についても演習により体得します。

本コースは今年で15回目を迎えますので、来年からは更に効率的に研修できるように内容を見直し期間も短縮して、更に研修員が参加し易く有益なコースにして継続したいと考えております。



JICAコース『生活排水対策』

コースリーダー 小川 勝

人口の増加、及び文化・生活の向上とともに水の使用量は増大し、一方で使用された水による環境汚染、さらには衛生上の大きな問題を引き起こしています。特に発展途上国においては、産業排水もさることながら、生活排水の垂れ流し、処理技術や設備の遅れ、メンテナンスの不十分さから河川・地下水の汚染、周辺環境の破壊などが指摘され、それは飲み水の汚染、衛生上の大きな問題となっています。

発展途上国の本コースへの要望は極めて多く2000年以降でも61カ国の希望があります。優先順位の高い国は毎年本コース定員の2~3倍に達しており、水環境改善へのニーズの高さが窺われます。

日本の下水道は欧米諸国に遅れてスタートはしたものの、日本の多様な地形に対応するため、水処理技術の多様性・高度化、水資源政策は先進国の中でも優れており本コースはこれら技術を移転するきっかけを与えるものとして位置

づけています。

15年度までに14回の生活排水対策コースを実施しました。各国の国内における局地的な地理的条件をも勘案し、最適な排水処理技術・装置を選択する必要があることに加え、衛生上の緊急性や長期的観点からの対応など事情が異なることから、幅広い知識・見学を主体としたカリキュラムを設定し、日本における多くの生活排水処理技術を修得・見聞する中で、最も適した技術を選択出来る力を養成することを心がけています。

水環境問題は即地球環境問題でもあります。本コースでは、日本の公害問題への対応から地球環境問題を入り口に、水環境汚染のメカニズムや河川管理、環境教育の重要性などに加え、研修旅行を通じて日本の文化や、自然環境、唯一の原爆被爆国としての経験等を見聞する機会をつくり、世界の良きパートナーとして日本を良く理解してもらえるように努めています。

KITAの国際親善交流

KITAのホストファミリーと研修員

北九州市小倉南区
高橋謙一郎様
節子様

KITAの理念「地球規模の愛」の下に！
香辛料としての私の役割

KITA事業の1分野である来北研修員のホストファミリーをお引き受けして20年が経ちます。小学生だった子供達も彼ら研修員と接しながら今や立派な？技術者として社会に貢献しています。研修員と過ごした楽しいこと、また、苦しいことはとうていこの紙面では語り尽くすことが出来ませんが、私がビジターに対して感じたことは、彼らは日本のことを非常に良く勉強しているということです。専門分野のテクノロジーのみならず、驚くほど日本の歴史、文化、芸術、宗教、哲学等、質問攻めに遭います。幸いに友人の中にその専門的知識を持ち合わせている人達が多くいますので、研修員の知りたい日本、北九州のことは、友人を招いて、同じ釜の飯を食い、酒をくみかわし、楽しく過ごします。時にはハメをはずして門限に間に合わないこともたびたび。(JICAの皆様ごめんネ！)

思い出せば、中古車を買って南米のガイアナまで送ったり、北九州で一旦研修を終えて帰国後、阪大で博士号を取得するために奥さんと一緒に再来日し、大阪茨木市に住んでいるので、ぜひ嫁さんに会わせたいので会いに来いというので会いに行ったり、祇園祭に連れて行ったら太鼓のリズムに合わせてアフリカのダンスを踊りだし、日本の若者から頼まれてビール片手に乾杯しながらすぐ友達になってしまう研修員がいたり、すべてが楽しい思い出です。

最後になりますが、本当にこの事業はすばらしい！研修員にはすばらしい北九州の技術を習得し北九州で出会った人々との楽しい思い出をおみやげにそれぞれの国に帰られて活躍して欲しいということです。



小さかった息子二人は今や立派な(?)エンジニア

北九州市小倉南区
園田 彰一様
フサ子様

親、子、孫 三代で

KITAにお世話になって早や17～8年になります。初めは何もわからず、何をどうおもてなししたらいいのか緊張でいっぱいだったことを思い出します。けれども不思議なことに時間がたつにつれ、昔からの知り合いだったような気がしてきて外国人であることも忘れるほどうちとけていく過程は今も変わらない感覚です。子供たちに世界の広さと、コミュニケーションの方法である英語を語りたい思いの当初、小学生だった長男も今年30才を迎え、妻と子供二人(もうすぐ3才の双子の女の子)を伴って参加しています。最近、研修員の方々と親と子供の年の差に気づいてガク然としたり...ですが、それでも学ぶことの方が多く、受け入れ側の意見として毎年のことですが彼らの方が私たちより日本のことをよく知っているねと感心しています。

オリンピック直前の2004年8月、毎日寝不足なのにライブの感動に胸うち震えて、夜更かしが続いています。オリンピック開催にまつわる種々のエピソードに、先人たちの平和への飽くなき渴望と追従へのさまざまな形の惜しまぬ協力を目のあたりにする反面、テロへの警戒や恐怖も存在することも現実ですが、人種、年令、宗教、政治、経済、男女の差を超えて、人間の感動の気持ちに変わりがないことを、外国からやってきた人々との関わりあいの中で、種々の経験を通じて学び、国際理解を個人レベルで子に孫に伝えていけたらと思ひ、小さな国際親善大使をきどっています。



フィリピンの二人のゲストと我が家にて

KITA / 北九州メンテナンス技術研究会 (KME) 総会・講演会

去る7月22日(木)、KITA / 北九州メンテナンス技術研究会 (KME) の平成16年度総会・講演会が、北九州市八幡東区の千草ホテルで行なわれました。

総会では、平成15年度事業報告及び16年度事業計画が審議され、事務局提案通り承認されました。

総会終了後講演会が行なわれ、3人の講師による講演があり、60人を越える会員各社の管理者、技術者が出席し、盛会裡に終了しました。

講演は、まず北九州市環境局廃棄物指導課主査の門屋裕一講師により「北九州市のPCB処理について」、北九州市の取り組みの現状と法規制の内容の紹介があり、続いて(有)日本診断工学研究所代表研究者の豊田利夫講師より、今年度より発足した「ISO機械状態監視診断技術者(振動)認証制度の紹介」が行なわれました。引き続き(株)安川電機モーションコントロール事業部部長の善家充彦講師より「インバータの寿命・信頼性」について説明がありました。

いずれの講演も現在各企業で関心の高いテーマを取り上げており、参加者より活発な質問が出されました。



KME講演会

KITA / 北九州環境研究会 (KISEC) 総会・講演会



KISEC講演会

7月30日(金)、北九州環境研究会 (KISEC) 総会及び環境国際協力・環境ビジネス講演会を開催しました。今回は

産・学・官それぞれの立場から環境ビジネス推進の第一人者として活躍する講師を招き、主に企業関係者の関心を大きく惹く内容となりました。

講演では、北九州市企画政策室主幹 矢頭基秀氏が、「特区に期待する環境ビジネスの可能性」と題し、特区認定第1号の指定を受けた「北九州市国際物流特区」について講演しました。

続く講演では、九州大学大学院教授 許斐敏明氏が、「再生可能エネルギーと燃料電池」と題し、エネルギー情勢の変化と燃料電池の将来性について、トヨタ自動車研究員時代の経験を交えて講演しました。

そして講演では、JFEホールディングス(株)大野陽太郎氏が、「DME(ジメチルエーテル)への期待」と題して、DMEの将来展望について紹介しました。

満員となった会場では多くの質問が出され、その関心の高さを再認識できました。研究会としては、環境ビジネスにより多くの関心が集まるよう、このような講演会を継続していきたいと思えます。

(財)西日本銀行国際財団からKITAへ助成金

(財)西日本銀行国際財団様(理事長:古賀誠二様)から、平成5年より毎年当協会の国際交流事業に助成金をいただき、

今年7月にも150,000円を賜りました。当協会事業へのご理解とご厚意に感謝申し上げます。

| 編 集 後 記 |

日本のメダルラッシュの五輪に近年めずらしく国中が感動と興奮を経験させてもらいました。「本人の不屈の努力」と「指導方法の向上」の相乗効果を見事に発揮し、世界を振り向かせたすばらしい快挙。なかでも柔道、競泳、女子マラソン、団体体操が印象的。かって東京都知事が「東京が

ら日本を変える」と言ったのを思い出し、ギリシャからの熱い映像に陶酔し、「オリンピックから日本が変わるかも」と過剰反応してから早や2か月経過の秋。ODA(政府開発援助)の事業実施の一部技術研修を担当させてもらっている当協会も、産官学・民のそれぞれもてる力の相乗効果発揮のインテグレーターとして、「不断の努力」が求められると改めて自覚しています。(N)